

# 教科書教材をメディア・テキストとして読むことの考察 - 高等学校現代文『こころ』（夏目漱石）の読みを例として -

上松 恵理子

## Abstract

This paper focuses on the concept of reading in Japanese language education textbooks which use Natsume Soseki's novel, *Kokoro* as a media text. The current model of media literacy in Japanese language education focuses on these textbooks for reading classes. However students can develop a deeper understanding of the main themes in texts if they have some proficiency in media literacy. Several textbooks are considered individually, and I analyse how the differences in each textbook affect the reading of learners, and how learners get different perspectives from the textbooks in comparison to original text.

キーワード.....メディア・テキスト メディア・リテラシー 教科書教材

## はじめに

高等学校現代文『こころ』（夏目漱石）の読みを例として、教科書教材をメディア・テキストとして読むことを試みた。文学作品をメディア・テキストとしてみることは、メディア・リテラシー（メディアの読み解き能力）の視点から読み解くことが可能<sup>1)</sup>となる。このことによつて、学習者に、総合的な読解力を培うことになるからである。『こころ』（夏目漱石）がメディア・テキストとして最初に高等学校の教科書に登場したのは1960年代半ば頃（松原 1992:2）である。それから、1970年代には殆どの教科書に掲載され安定教材となつていった。『こころ』の特性は「創作態度は明瞭に倫理的であり、記述は簡潔かつ明瞭、文体は抑制美の模範ともいふべく、その効果はきわめて深い」（江藤, 1964:511）と言われている。また、漱石の死の2年前に執筆され、漱石作品の集大成である『彼岸過迄』『行人』と同じように、短編を幾つかつないで全体として一箇の長編小説に仕上げる方法（荒, 1967:152）を取っている。齋藤は「授業で提示される教材は多様である。そこで、研究授業を行う際には、教科書教材であっても、原典を見ることを勧めたい」（齋藤, 2007:69）と論じている。教師が原典を見ず、かつ、原典の一部しか掲載されていない教科書教材からの授業実践によつて、作品本来の主題を捉えることは難しい。各教科書の取りあげられ方は様々であるため、学習者の読みに差異が生じる可能性がある。また、学習者は原典の解釈と違った捉え方がされてしまう場合が考えられる。作品をメディア・テキストとして読むことにより、学習者が多角的な視点から解釈することが可能

となるため、それらの点が解消され、より深い読みが可能となる。

## 1 「明治の精神」についての掲載

### 1-1 教科書教材としての『こころ』のメディア特性

『こころ』は高等学校の教科書教材にあるが、全文が掲載されるのではなく、殆どの教科書が「Kの自殺」の前後だけに限定された形で出版されている。したがって、全ての学習者が『こころ』を部分的に学習するという形になっている。「私」と「先生」のやりとりが暗示している、言葉の流通（コミュニケーション）に伴う言葉の位相のねじれ（柴，1992：33）のような現象は、複雑な様相を呈しているが、これらは、掲載のされ方によって、さらに複雑な位相となる。

原典においては、Kの自殺がもとで、「先生」が最後には自殺をする結末となるが、その際、「先生」は妻に「明治の精神に殉死するつもりだ」と述べ、そして、その言葉に意義を見出しているにもかかわらず、教科書教材には、「先生」が妻に言った「明治の精神に殉死するつもりだ」という部分の記載がほとんどない。数社があらすじのみである。

「先生」の自殺は「明治の精神」の死と「新しい個人主義」の表象がされていて、主題に深く関与するにもかかわらず、それらの点について、教科書教材の掲載のされ方をみると様々な課題が見えてくる。結論として、Kの自殺に伴う、恋愛をめぐるエゴイズムの問題を中心に掲載する方法は、作品全体の主題を掴むことを困難にしていることが考えられる。このように、「明治の精神」についての掲載のされ方、一つにおいても、多様な取り上げられ方がされている。

平岡は<主人公が青年（大学生）であること><先生とKが親友であること><お嬢さんが恋愛の対象として関わって、三角関係となること>の3点をあげ、「古今東西普遍的な性格を『こころ』はもっている」ことが、生徒に受け入れられて、長期安定教材となっているのではないかと述べるとともに、採録の仕方に安定教材という意味がある（平岡，1983：6）という。

このようなメディア・テキストとしての特性を理解して、学習を進めていく必要がある。

### 1-2 Kの自殺

『こころ』は本来、「先生」の遺書が中心である。しかし、本稿で分析対象とした教科書の全てが、Kの自殺を中心に本文を掲載しているといった特性がある。多くの高校生は教科書教材から、Kの自殺は失恋がきっかけであると考えられる傾向がある。しかし、実際は現実との理想乖離、あるいは淋しさであり、その部分の記載はない。私が「現実と理想の衝突 それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のやうにたった一人で淋しくて仕方がなくなった結果、急に所決したのではなからうかと疑いだしました<sup>2)</sup>」とあるが、この部分は「先生」の遺書部分であり、殆どの教科書教材に掲載されていない箇所である。平岡も「Kの自殺が現在なお教師・生徒によって信じられているらしい失恋による自殺ではないとすれば、Kの残した読み方も違って来るはずである」（平岡，1983：9）と述べている。

加茂は『先生』が明治の精神に殉ずるという場合、『自由と独立と己れとに充ちた』『明治の精神』に対して、とする解釈が、乃木將軍の殉死という封建遺風邪の美德？の生き続けて来た『明治の精神』というものと衝突し、学界でも議論のある難しい問題である。だから各社さけているのだとするのならうなずける」(加茂, 1981: 26)と述べている。

また、教科書には、Kの死のきっかけとなる「先生」との生活やKの死の場所の詳細を示した下宿の間取り図の掲載がある。掲載されている教科書は『新編現代文』東京書籍(2008)、『現代文1改訂版』大修館書店(2008)である。また、『改訂版高等学校標準現代文』第一学習社(2008)と、『高等学校現代文』第一学習社(2008)は全く挿絵の無い中、間取り図の挿絵だけが例外として載っている。『現代文新訂版』筑摩書房(2008)は、『こころ』の本文には間取りが掲載されていないが、教科書の扉絵に掲載されている。これらの各教科書の間取り図の違いにより、読みのイメージに差異が生じる。図のイメージによる学習者の読みへの影響も考慮して読み進めていく必要がある。

### 1-3 『こころ』の作品に表れた漱石の「明治の精神」についての記載

漱石が言うところの「明治の精神」が何を意味するのかという点を考察してみたい。まず、様々な説を次にあげてみる。

「明治の精神」とは、明治とともに始まった、自由と独立の個人的な精神である。しかもそれは必ず、孤独の悲しみと、懐疑という地獄を裏側にはりつけている。個人における近代の反射の総体としてのエトスにほかならない。それが、漱石のいう「明治の精神」の実態である。(松本, 1979: 77)

その世代は「尊い過去」の記憶を引きずりつつ、そのことに、まさにどうしようもない「淋しみ」を感じなければならないのであり、そして、おそらく、ここにこそ、「先生」のいう「明治の精神」があったといえよう。漱石における個人主義の完成が、人間の原罪に対する西欧的伝統への苛烈な否定ともいえるべき「先生」の自殺を介してなだれていることは、「殉死」という東洋の意味づけとも相俟って、反「西洋的近代」としての「明治の精神」の位相を示すものである。(佐々木, 1980: 49)

<自由と独立と己れとに充ちた現代>が、「先生」が殉死したあの「明治の精神」の総体を意味するものではない。それは「明治の精神」の一面であり、他の一面は、「自由と独立と己れ」の、いわば「自己本位」の精神の犠牲となり、寂寞に襲われざるをえない淋しい「明治の精神」である。(小島, 1975: 73)

小島は「先生」の死について、「『先生』はこの二つの矛盾する『明治の精神』を抱いて、淋しく生き、時代の終焉とともに死ぬのである」（小島，1975：73）と述べている。桶谷も二つの矛盾する明治の精神として次のように述べている。

自由と独立と己に充ちた現代」が、「先生」が殉死した「明治の精神」の総体を意味するものではない。それは、「明治の精神」の一面であり、他の一面は「自由と独立の己れ」のいわば「自己本位」の精神の犠牲となり、寂寞に襲われざるをえない淋しい「明治の精神」である。（桶谷，1972：185）

との論及がある。また、「明治の精神」がこの作品全体の表象に関わるとした論も諸説ある。漱石が『こころ』に込めた「明治の精神」に関しては次のような説がある。

「明治の精神」は漱石に意識されていたと思うのです。つまり、漱石が「明治の精神に殉死する」と「先生」に口走らせたとき、それは新旧のせめぎあいの明治、過渡期の明治はもう終わったのだとの、感懐を意味していたのであって、だからこそ、「行き残っているのは必竟時勢遅れだ」との言葉になったのだと思います。（駒尺，1970：159）

「明治の精神」の終焉とともに「先生」を自己抹殺させたことは、漱石が自己なる「明治」をいったん否定したことであって、いわば内なる自己の問い直しであったとわたしは考えます。（駒尺，1970：160）

『こころ』の「先生」を「明治の精神」に殉死させることを通じ、何よりも自己のうちなる「士太<sup>(ママ)</sup>夫の精神」＝国家社会に係わるものとしての選良の意識を「過去」に葬り、大正現実のうちに一人の「市民」として自と他の相対的<関係>の世界に蘇らせようとしていた。（小泉，1979：139）

人間が本来エゴをもつ以上、「明治の精神に生きる」 正確に言えば、そのみに生きるだけでは人間の問題は解決しないということである。「先生」の自殺は、そのような「明治の精神のみに生きること」の限界を示すものではなかったか。（三浦，1964：54）

殉死した対象の素朴な真情に強く心を動かされれば動かされるだけ、そこからいつの間にか愚昧な迷信と破廉恥な虚偽とを作り出す明治の垂流どもを、烈しく憎悪せずにはいらなかったであろう。（滝沢，1977：41）

滝沢の論は、漱石が殉死した対象の素朴な真情に強く心を動かされれば動かされるだけ、哀

悼の至情を國民そのものによって、作品に言い表しているといった観点である。事実、漱石は『私の個人主義』において、「文学とは何んなものであるか」と述べ「その概念を自力で作上げるより他に私を救う途はないのだと悟った」と述べている。

「明治天皇の死と乃木大将の殉死は、漱石にとってはまことに一時代を画するにたる事件であり（玉井 1976：124）、乃木大将は、薩摩の乱の時（死の 35 年前）に、連隊旗を奪われたということが、自分自身の中での呵責となり、死ぬことばかり考えて生きてきたが、明治天皇が崩御した際に殉死した、という一般的な解釈であっても、「先生」の半生に酷似している（梶木 1976：189-190）といった点を歴史的な解釈から学習者に捉えさせる必要がある。

以上のことから、『こころ』の主題を語る上では、この部分の、特に歴史的な背景の解釈は必須であることが分かる。このように肝心の「明治の精神」についての記載が少ないまま、教科書に掲載されたという事実がある。「明治という時代の終焉は、それを生きた人たちにとって、一つの時代が終わったことを意味した」（桶谷，1972:177）のであり、『こころ』の主題を捉える授業実践の際には、それらの説明も必要である。

漱石の考え方は判然としないところがあり、解釈は多岐に渡り、色々な説がある。教師がこのことを認識し、コンテキストの周知を図ることが大切である。個人主義という言葉から次のキーワードである、自殺という点を考えていく必要もある。

#### 1-4 教科書教材に記載された「明治の精神」

各教科書によって掲載のされ方は様々である。ここでは、8冊をみていく。

「明治の精神」という言葉が掲載されているのは ~ ある。~ は最後のあらすじとしての掲載である。また、Kが雑司が谷の墓地に埋葬されたことにも触れている。現在、夏目漱石自身もこの霊園に埋葬されている。雑司が谷が登場する理由は漱石の娘ひな子が葬られているからではないだろうか。つまり、「菩提寺から何の関わりもない公営墓地に葬られたひな子を自分の「家」から絶縁した孤独と重ねていたであろうし、また、ひな子が漱石の分身だったように、Kも漱石の分身にほかならなかった」（平岡，1976：357）ということからも、その理由が考えられる。以降は「明治の精神」という言葉の記載はない。

『現代文 改訂版』教育出版（2008）の記載

『現代文 改訂版』の教科書には「天皇崩御」「明治の精神」「明治の精神に殉死する」という言葉が登場するが、これは最後の1ページに書かれた〈その後のあらすじ〉というところである。『こころ』は小説に位置づけられ、森鷗外の高瀬舟とともに掲載されている。最初に『こころ』の構成（3部構成であること）の説明が4行のみ（実際には『こころ』の漱石自筆の扉絵が下に載っている、その上の4行）書かれており、その後は3部にあたる〈先生と遺書〉の本文までのあらすじが26行書かれている。次ページから19ページに渡って本文が記載され、その後、左1ページにその後のあらすじが15行書かれている。ここで特徴的なことはKの自殺

についての「先生」の捉え方が載っているところである。先生の自殺の理由は「天皇崩御での乃木大将の殉死が報ぜられた後、「先生」は明治の精神に殉死するつもりで自殺を決意した」と書かれているが、「私の過去を善意とともに人の参考に供する」つもりで遺書を書き残したここにも触れている。「死の道」だけが「不可思議な恐ろしい力」によって開かれていたという、「先生」が自殺へプロセスを歩む心情について書かれている。「不可思議な力」について、遺書ではその後「不可思議な私」として記されているが、それに関する記述はない。Kの自殺の原因は「現実と理想の衝突」「一人で淋しくってしかたがなくなった」結果だと「先生」が結論付けている点を記載している。

『新版現代文』教育出版（2008）の記載

『新版現代文』の教科書は ～ と同じように、＜その後のあらすじ＞に「明治の精神」「明治天皇が崩御」「明治の精神に殉死する」のキーワードが書かれている。また、Kの自殺の原因は『現代文 改訂版』と同じく、「現実と理想の衝突」「一人で淋しくってしかたがなくなった」結果だと「先生」が結論付けている点の記載がある。＜あらすじ＞と＜その後のあらすじ＞も、『現代文 改訂版』と同じであるが、小説の単元において＜夏目漱石の個人主義＞と題している。そして、最後に夏目漱石の個人主義についての記載があり、学習者の生き方問題に通じるように書かれている。「真の個人主義とは、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬する」と記述されている。

『新編現代文』東京書籍（2008）の記載

『新編現代文』の教科書には死の道の記載は、「死の道」（自殺）として書かれており、「明治天皇が崩御し、「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がした」と書かれている。「明治の精神に殉死するつもりで自殺を決意したことも掲載されている。これらはすべて、最後のあらすじ（17行であるが、実際ページの下に『こころ』の原稿が掲載されているので、約半分のスペースである。）に、掲載されている。『こころ』は「文学と人生」という単元に入っている。「長編小説の主題を、場面の展開や人物の性格・心理の描写から読み取る力を養う」と書かれている。『こころ』の初版本の表紙とともに、上・中・下の三部からなっている構成の説明や登場人物について、最初の右1ページに書かれている。左1ページには本文までのあらすじが書かれている。24ページの本文の後、本文以降のあらすじが書かれている。このような記載の方法で、主題を把握させるという記載方法である。

『現代文1改訂版』大修館書店（2008）の記載

『現代文1改訂版』の教科書は、「明治天皇の崩御」「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がした」「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだ」と答えたことが最後の＜その後のあらすじ＞に掲載されている。また、乃木大将の殉死の原因となった西南戦争に関する説明書きが付記され、また、「妻が殉死でもしたら」とからかったことも書かれている。乃木大将に殉死について、「生きていた35年間で苦しいか、また刀を腹へ突き

立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろう」と「先生」が考えたことの記載がある。「不思議な私というものを」「先生」自身のところとして書き残して死んだということが、あらすじの最後に書かれている。あらすじは2ページに渡って記載され、他の教科書に比べ比較的長めに書かれている。本文も30ページであり、本文掲載部分までの〈これまでのあらすじ〉も、2ページに渡って書かれている。

『改訂版高等学校標準現代文』第一学習社（2008）の記載

『改訂版高等学校標準現代文』には、「明治の精神」という言葉の記載はない。「生まれたときから潜んでいる「人間の罪」というものを深く感じる」といった記載があるのみである。しかし、「明治天皇の崩御」「乃木將軍殉死」という言葉があつて、その2、3日後に「先生」が自殺を心に決めたということが〈その後のあらすじ〉の中に書かれている。「生きているのは畢竟時代遅れ」といった言葉もある。『ころ』は小説を読むという単元の中に『鼻』と並んで載っている。『ころ』の1ページ目は三部構成の説明と、登場人物の説明である。その左ページには他の教科書と同様に「下 先生と遺書」省略部分のあらすじが載っている。24ページと少しが本文であり、〈その後のあらすじ〉が1ページ弱、掲載されている。

『高等学校現代文』第一学習社（2008）の記載

『高等学校現代文』は同じ第一学習社の教科書ということもあり、「明治の精神」の記載については『改訂版高等学校標準現代文』と同様である。

『現代文新訂版』筑摩書房（2008）の記載

『現代文新訂版』には作品の構成に関する説明はない。また本文に「明治の精神」の記載がない。また「明治天皇」「殉死」という言葉もない。また、最初の部分には、あらすじのように書かれている部分が1段下に下げた形で約1ページに渡ってあるが、遺書の一部であることと、遺書の書き出しから本文までの要旨が書いてあるのみである。また本文は約27ページに渡って書いてあるが、その文は『ころ』の作品の途中で終わっている。そして、後のあらすじの記載はない。『ころ』の作品が途中でカットされて掲載されていることが、明らかになっていない。最後に「夏目漱石と『ころ』」というコラムのような形で掲載されているが、これは作品についての解説である。ここに、『ころ』の「先生」が自殺をしたきっかけが「明治天皇の崩御」と「乃木希典大将の殉死」であったことが記載されている。しかし、『ころ』の「先生」は正確には「明治の精神」とともに殉死したということは書かれていない。単元は小説であり、異例な課形で「夏目漱石ところ」というコラムが記載されている。

『高校生の現代文』明治書院（2008）による記載

『高校生の現代文』の教科書には明治の精神という言葉が最後に付記された9行の〈粗筋（あらすじ）〉に掲載されている。私は「明治の精神に殉死するつもり」でついに自殺を決意したと書かれている。『ころ』の掲載箇所は「小説を味わう」という単元であり、最初に『ころ』が「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三篇から成ると記している。上の編

については10行、中の編については6行の要旨、下の編については2行の説明が書き込まれた後、乃木大将についての2行の解説書きがある。次ページに、下の編の教科書掲載部分までの粗筋が見開き右ページに書かれた後、左のページからは本文が始まっている。約20ページの文章で掲載が終了し、その後には、文章の補足として、その後の粗筋が9行掲載されている。

下の文の最後の粗筋には「Kの自殺」のこと、「先生」の自殺することと遺書を書く理由が書かれている。先生の自殺の理由は「天皇崩御での乃木大将の殉死が報ぜられた後、『先生』は明治の精神に殉死するつもりで自殺を決意した」とある。

### 1-5 教科書に現れた「明治の精神」

このように、高校の教科書教材にはKが自殺をしたところが中心であった。「明治の精神」の語句は、後のあらすじのところに載っているものもあるが、殆ど掲載されていない。このことにより、何故、「明治の精神」によって、死という結末を迎えなくてはならなかったのか、学習者の中には疑問に思う者が少なからずいるであろう。小森も、「明治の精神」との関連のところは教室では問題にしにくいとして、「生徒が考えてもほとんど何も出てこないので、『先生』が一生懸命勉強して話をする、というように多分なるだろう」（小森，1992：4-5）と述べている。この「明治の精神」についてを教室で取り上げることは、明治時代の歴史的背景や解釈も含むため、難しいところである。明治の精神という言葉には、「知識人のエゴイズム」（石原，1996:16）があり、このコンテクストをはずすと、違った視点で捉えてしまう可能性があるという。明治天皇、あるいは乃木將軍という言葉は明治という時代の象徴的人物であるが、それが「精神」ということになると、現代社会に生きる学習者にとっては難しいものがある。

## 2 漱石の個人主義の表象

漱石は大正3（1914）年に『心』を寄稿するが、この大正時代の国語科における学習法にも、このような読ませ方が存在した。「国語科における学習訓練」（堀江，1926:587）には、鑑賞批評＝名文の記憶、印象批評、また、趣味の涵養＝人生を楽しみ、文学趣味の養成といったものが存在している。「この作品は、生徒に、文学の読み方、文学のもつ深い感動、人生に対する思索の深まりをもたらすに違いない」（公文，1979：46）といったような、『こころ』を通じて、生き方に触れる、といった読み方が国語科の教科書において存在している。

### 2-1 『こころ』に表れた漱石の個人主義

工藤は『こころ』は文学の教材として読まなければいけないし、同時に、人間性の向上、または回復を求める文学教育に適合する教材と言っていい。（工藤，1979：37）と述べている。そして、『こころ』の「先生」を中心に考えてみると、三種のエゴイズム（工藤，1979：34）が存在するという。金（財産）、愛、自殺である。しかし、このようなエゴイズムから、漱石自身が



『私の個人主義』で述べたような「他を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬する」という〈真の個人主義〉といったニュアンスの異なる言葉が、なぜ教科書教材に出てくるのであろうか。

この問いは、「内向的なエゴを極限にまで追いつめ、主人公の一人を、そのことによってついに自殺にまでいたらせた漱石」が、『私の個人主義』で述べている個人主義なるものは、「個と他の関係をいかにして調和さすか」(玉井, 1976: 128-129)と、なぜ述べているのかという問いとほぼ等しい問いであることが考えられる。例えば、江藤は『こころ』に描かれているエゴイズムと人間の孤独の問題をロンドン体験から考察している。「愛よりはエゴイズムという人間の病気の方が強力であった」(江藤, 1964: 510)と述べている。

しかし、学習者は、作品の内容とその後の解説に出てくる夏目漱石の論評や『私の個人主義』についての解説との、このニュアンスの違いを目の当たりにして、疑問を起すことが考えられる。教師は、この点に関して、学習者が何か判然としないまま、学習を終わらせてしまうことはないように努めることが肝要である。

滝澤は「48歳の漱石を敢てさう(未だ自己本位が続いているということ)云はしめたものは、『汝自身を知る』ことを求めたソクラテスのそれに似た使命感に他ならなかった。それなればこそ漱石は、『學問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、或いは十年二十年の仕事としても』、『どんな犠牲を拂っても』、し遂げなければならない一大事として『自己本位』の4字を説くことが出来た」(滝澤, 1955: 52)という。このころの漱石は、すでに「自己本位」を立脚地とすることが出来た人であったという。『こころ』の「先生」は、「強い事実」を痛切に体験し、そこから「損利着(「先生と遺書二」)」ではない思想をまとめあげた人であった。先生もまた「外発的」な文化や思想のあり方に漱石と同じように批判的な知識人」(玉井 1976: 112)であったということである。

この点から、玉井の論である、「先生」の死は大変倫理的な死であったという点と、倫理の勝利、愛の敗北を意味している。乃木大将の殉死に、「先生」があれほどの感動を示したのも、このことと関連する。倫理的に生まれ、倫理的に育てられた「先生」もまた、倫理への殉死によってまっとうした」(玉井, 1976: 123)といった点も踏まえなければならない。「漱石が自分の個人主義がどういふ性質ものであるかといふことを、巨細に説明した」(小宮, 1975: 206)というメディア・テキストであることを理解する必要がある。

## 2-2 個人主義と遺書

漱石の『こころ』には5つの死が描かれている。「明治天皇」「乃木大将」「父」「K」「先生」の死(玉井, 1976: 103)である。しかし、「先生」の死は、遺書という形で多くのページを割いている。

遺書としてテキストの特性を捉えてみると、学習者の役割として「先生」からのメッセージを受容する立場が必要となる。『こころ』には、「先生」の遺書が作品の多くを割いている。遺

書は、書く側からすれば、伝達するコミュニケーション手段となり得る。しかし、読む側としては、読んだ後では、書き手に対するコミュニケーション手段が無い。それは既に、この世にいないからである。つまり「コミュニケーション手段を廃棄する」(中村, 1994:51)という行為である。このことから、中村は「『ころ』は一種の探偵小説であり、『上』『中』で謎として設定された『先生』の真相が『下』によって明らかにされます。探偵小説としての『ころ』は、真理という目的へ到達するプロセスであり、遺書はそれを伝達するための手段です」と述べ、コミュニケーションへの偏執によって成立するテキストだと断定している。また清水は「『ころ』の中核をなす<運命のアイロニー劇の構造>において、この<隠蔽と暴露>という、アリストテレスの言葉をかりれば<急転と発見>という筋構造(プロット)が、どう装置されているか」(清水, 1982:140)と述べ、入子型をなして、深層に向けて装置されているという。

これらの点から、遺書における時間の遠近法をとらえ、遺書の中での「先生の心」と「回想の事実」という局面を分けて考える必要がある。

「高校の国語の授業などでは、『先生』の『自殺』の理由を明治天皇が死んだ際に、『奥さん』の『では殉死でもしたら可からう』という『調戲い(からかい)』に対して『もし、自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答え』たことを契機として、乃木大将の殉死を知ることが直接の原因となった、という解釈が一般的」(小森, 1999: 228)となっている。そういった背景も踏まえ、授業の現場では、遺書の一つのテキストとして、「先生の言説を相対化するという討議が必要」(小森, 1992: 13)という。メディア・テキストとして捉えると、この頃に個人主義が高まり、「人間の自我の対立という社会の根本問題」を「単一の問題として先生の思想に現されている」(伊藤, 1959: 532-533)という点で、漱石後期の作品を理解してとらえることが可能となる。

Kと「先生」とは、孤独な<明治の死>を選んだ(石井, 1983)ことが乃木將軍の死とは違っている。乃木將軍は殉死をしたが、夫人とともに、天皇に殉じているからである。また、遺書を書くために自殺する期日を延ばすことが渡辺崋山が画を描くために死期を1週間繰り延べたという記載がある。また、漱石自身も、この『ころ』を書いたのは数えて48歳の年であり、死の前々年にあたる(古井, 1990: 293)という。三好は「先生」の殉死は固有の倫理をつらぬいた、自己処罰の帰結としてある(三好, 1983: 181)と述べている。「殉死という行為は、他者の死を自分の死の唯一の理由とする無償性、没我性において、<自由と独立と己れに充ちた現代>とはるかに対峙する」(三好, 1983: 182)という。

「先生」は自らを時勢遅れとし、劣等感を持っている背景から遺書という形になったことが考えられる。しかし、教科書教材に、遺書が妻に内緒で書かれ、それを秘密にして欲しいという「先生」の願いが書かれた掲載はない。メディア・テキストとしてみた場合、何故奥さんに遺書を書かないのか、といった批評的・多角的な観点でこの作品を読むこともできる。

## 2-3 教科書に表れた漱石の『個人主義』

『現代文新訂版』筑摩書房(2008)に代表されるように、漱石の『こころ』の読みは、高校生である学習者の人生の来るべき新たな時代へのメッセージがこめられていることの示唆から、今後の人生の生き方に結びつけようとしているものが多い。石原はこのことに関して、<「国語」の漱石>という言葉を使って、「あらゆる<読み>はテキストと<読者>との関わりによって『生産』されるもの」(石原,1999:11)という考えをもとに、この考え方が漱石のオリジナルな思考が語られているものではないことに言及している。漱石の「私の個人主義」は岩野清の「個人主義と家庭」(『青踏』大正3(1914)年10月)の文章とほぼ同じ結論というのである。『現代文新訂版』(2008)筑摩書房は、漱石の「私の個人主義」を「自身の半生を振り返りながら当時の若者たちに送ったことば」として記述されている。石原の述べている、「高校生に教訓するところ」の部分を見たい。

『現代文 改訂版』教育出版(2008)の記載

『現代文 改訂版』教育出版(2008)には作品の最後にある、作品解説に「個人主義思想の台頭とともにあらわになった我執の切なさや醜さ、理想を追い求める人間の宿命的苦悩、人間が本来持っている『淋しさ』の問題等、さまざまな課題について考えられる作品である。」と記載されている。漱石の筆跡である「則天去私」の書がある。学習の手引きには、感想文を書かせる項目はあるが、個人主義や生き方の問題についての記載はない。

『新版現代文』教育出版(2008)の記載

『新版現代文』教育出版(2008)は<夏目漱石の個人主義>と題して2ページに渡っての記載がされている。夏目漱石は前述したように、『こころ』を大正3年に起稿している。その同じ年に行われた講演「私の個人主義」の内容である。夏目漱石が文明批評家としての一面があるということ、漱石の時代の問題を含めて、夏目漱石の個人主義について総合的に論じた内容である。「他人本位」と「自己本位」の概念を述べ、それから、「利己主義」「我儘」「個人主義」という言葉の違いについて言及している。まず、「他人本位」とは、西洋の文学を西洋の基準に合わせて理解しようとすることである。日本の開花もそうであり、それは、「外発的」「皮相上滑り」である。それに対して、「自己本位」とは、自分を基準にして他人を図る「利己主義」「我儘」でなく、「他を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬する」という真の個人主義のことであるというのである。それは、学問だけでなく、生き方にも通じると、若い聴衆に向けて語りかけているのである。

『新編現代文』東京書籍(2008)の記載

『新編現代文』東京書籍(2008)は、『こころ』の作品に入る1ページ前に、「文学と人生 こころ」と書かれた表紙がある。ここには、右下に、「小説に描き出された人物の思考や行動をとおして、人生についての考えを深める」と書かれている。また、左下に、「小説の中の出来事は、本当にあった出来事でもないし、ましてや自分に直接かかわりのあることでもない。それにも

かわらず、小説の中の出来事は、私たちの心の中の出来事である」と記されている。人生の生き方を探っていくという目標として、『こころ』の作品が設定されている。

『現代文1改訂版』大修館書店（2008）の記載

『現代文1改訂版』大修館書店（2008）には、夏目漱石の個人主義や人生についてのキーワードはない。学習においては、印象に残った場面や登場人物の心理を考えさせるもの、あるいは、私の心理をできるだけ詳しく考えさせるものであった。また、「色を失う」「追及」という言葉の意味を考えさせ、慣用句をみるといった活動を求めるものである。

『改訂版高等学校標準現代文』第一学習社（2008）の記載

『改訂版高等学校標準現代文』第一学習社（2008）は「文学への誘い」という欄に「終わりのない出会い」と題して、1ページに渡り、夏目漱石や芥川龍之介について書かれている。「人を深くかかわった後は、たとえ直接顔を合わせることがなくなっても、何度も、その人について、考えを巡らすことになる。そして、生きている限り、心に残された記憶は、何度も塗り変えられる」と述べ、ここにある『こころ』の作品も、人と人の出会いなのである、としている。また、夏目漱石が芥川龍之介に手紙を残したことにも触れている。小説の出会いも、新しい意味を見つけずにはいられない、終わりのない出会いとしている。

『高等学校現代文』第一学習社（2008）の記載

『高等学校現代文』第一学習社（2008）は「文学への誘い」の中で「漱石の三角形」と題して、『こころ』の人間関係の主である三角関係のエッセンスが詰まっているとする論評を載せている。また、他の作品である『虞美人草』『三四郎』『それから』『行人』も三角関係だったということが書かれている。他の教科書とは違って、『こころ』だけでなく、こうした様々な作品による反復された三角関係の人間関係について注目がなされている。それから、この『こころ』が新聞小説であり、その方法は毎日少しずつ掲載されるものだといったコンテキストについて述べられているのが特徴的である。

『現代文新訂版』筑摩書房（2008）の記載

『現代文新訂版』筑摩書房（2008）は前述したように、本文が途中で終わっているにも関わらず、その後のあらすじが掲載されていない。最後には「夏目漱石と『こころ』」というコラムが1ページ載っている。その内容は、『こころ』が夏目漱石の死の2年前に書かれたということ、3部構成だったこと、一世代下の芥川龍之介との交流のことなどが記載されている。「晩年の有名な講演『私の個人主義』は、自身の半生を振り返りながら当時の若者たちに送った心温まる助言である。」とある。最後に「先生」の死因が、天皇の崩御と乃木希典大将の殉死だったことに触れ、そこから、「漱石自身の、自ら生きてきた『近代』という時代への感慨と、来るべき新たな時代へのメッセージが託されていたのではないだろうか。」と記述されている。『こころ』の作品に潜むメッセージを考えさせる、という流れで話が終わっている。

『高校生の現代文』明治書院（2008）の記載

『高校生の現代文』明治書院（2008）には個人主義という言葉は一切無い。Kの気持ち、Kの自殺の理由を考える学習内容を想定したものである。

## 2-4 教科書教材に現れた漱石の個人主義

このように、漱石は『こころ』の作品に個人主義を内包させている。教科書の中には、高校生に、『こころ』を読ませることによって、自分自身の人生そのものについて考えさせる、といった方法をとっているものがあつた。また、具体的に、その個人主義とは、他を尊重した個人主義であるとした上で、小説を読ませるといった教科書があつた。漱石の『私の個人主義』の講演の一部を取り上げ、解説したとだけといったものもある。こういったメディア特性を踏まえさせた上で、漱石の『個人主義』の概念の真髄に踏み込んで解説することが望ましい。

## 3 明治の階層について

「階級意識あるいは階層意識とも言えるイデオロギー的システムが、言語コミュニケーションにはりついている」（小森，1996：36）といわれているように、階層の概念はメディア・テキストとして作品を読み解くひとつの方略である。（ここでは諸説を取り入れるため、次のことを確認する。奥さんとは、お嬢さん（「静」）の母とお嬢さんのどちらかである。区別するために、お嬢さんの場合には（「静」）と記した。お嬢さんは名前を「静」といい、Kとの三角関係の末Kの自殺の後に先生の奥さんとなる。）

### 3-1 女性の階層性

漱石の作品には、この当時の階層としては数少ない「主婦」が登場する。ここに出てくる奥さん（「静」）は「主婦」であり、当時がまさに「新しい女」という言葉に示されるような、「女」の転換の時代だった（朴，2007：385-386）からであろう。漱石は小説において「主婦を書き続けた。職業に就いた既婚女性は一度も書かなかった。このことは、この当時の時代状況を考えると、決して自然なことではない。当時は既婚女性も農業をはじめとした家事に従事するのが普通だったからである」（石原，1999：93）という。主婦というキーワードは、明治の時代がある階層においては女性においても、近代化したことを意味する。

また、主婦とは別のコードとして「未亡人」という言葉が出てくる。「静」の母も、また「先生」が亡くなった後の「静」も未亡人となる。「先生」はお嬢さん（後に奥さん）でなく、未亡人であった、「静」の母親にプロポーズをしている。しかし、「お嬢さん（「静」）と奥さん（その母）ととが、煮え切らない「先生」に、Kに対する嫉妬をおこさせるような「技巧」を用いて結婚にまで踏み切らせた」（石原，1997:198-199）という論もある。実際、このように複雑な心情のかけひきを追究していくためには、階層の言説も十分に理解する必要がある。

また、未亡人の「静」の母から見た言説がここに表出されている。小森は「静」の母と「静」

の時代では、同じ未亡人でも中身が違っていると述べている。「まず、日清戦争当時とそれ以後では、社会の未亡人に対するまなざしが違ってきます。日清当時の軍人未亡人は、夫なき後健気に生き、時には出家してその菩提を弔ったのに対し、世間もそれを美談としていた」（小森，1994：135）。しかし「1911年頃には『青踏』が刊行され、また文学協会が松井須磨子主演の『人形の家』を上演して話題を呼ぶなど、夫人問題が人々の興味関心の対象になり、揶揄する文脈にせよメディアにも取り上げられるようになってきた」（小森，1994:137）といった背景があり、「明治の精神」とは程遠くなりつつあったという時代の変化があった。このような短い間においても、女性に対する見方がニュアンスとして違った階層性の表現が行間に埋め込まれている作品であることを理解することも、メディア・テキストとして読むことの一方策である。教科書教材において、どのような形で母と娘の記載がなされているのかをみていく。

### 3-2 教科書に表れた母と娘（お嬢さん「静」）

『新版現代文』教育出版（2008）・『現代文 改訂版』教育出版（2008）の記載

お嬢さん（「静」）についての説明は、本文までのあらすじとしての所に記載されている。「日清戦争で戦死した軍人の奥さんと一人娘のお嬢さんのいる家に下宿して大学に通い始めた。」と書かれている。また、この親子の温かい心尽くしによって、「先生」の人間不信が和らいでいくといったこと、そして、お嬢さんに対しては「信仰に近い愛」といった記載がある。

『新編現代文』東京書籍（2008）の記載

本文に至るまでの部分のあらすじの中にお嬢さん（「静」）の記載がある。故郷を捨てて上京し、下宿に移って大学に通うというところに「軍人の未亡人である奥さんと女学校に通っているお嬢さんとが、家族同様に世話をしてくれるおかげで、厭世的な私の心もほぐれるとともに、しだいにお嬢さんに心が傾くようになった」と記載されている。

『現代文1 改訂版』大修館書店（2008）の記載

最初にお嬢さん（「静」）は「母と娘」として記載されている。それは、これまでのあらすじというところである。ここでは、「伝通院近くの母と娘だけの家に下宿する。」と記載されている。母については未亡人という語句はない。「親子」としての記載のみである。その次に「お嬢さんを愛しはじめていた私は、」と続いている。ここで初めて、お嬢さんという言葉が出てくる。

『改訂版高等学校標準現代文』第一学習社（2008）・『高等学校現代文』第一学習社（2008）の記載

「省略部分のあらすじ」というところに、未亡人という記載はなく、この母子を「遺族」としている。「伝通院あたりの軍人の遺族の家に間借りすることとなり、「奥さん」と「お嬢さん（「静」）」の温かな態度に接するうちに、しだいに心を開いていくようになった。」とある。ここでは、「「静」というお嬢さんへの気持ちの傾き」という表現で、お嬢さんの名前である「静」という言葉をあらすじに入れているのが特徴的である。

『現代文新訂版』筑摩書房（2008）の記載

本文までのあらすじが最初に書かれている。その中に「その家には軍人の未亡人である奥さんとお嬢さんがおり、『私』は二人と生活しているうちに、人を疑う気持ちを持ちながらも、お嬢さんに対してひそかな恋心を抱くようになった。」と記載されている。「先生」が人間不信に陥ったことで、未亡人の奥さんが「お嬢さん（「静」）との結婚」を策略しているという疑念持ったかもしれない、考えることも可能である。

『高校生の現代文』明治書院（2008）による記載

お嬢さん（「静」）については、「下」の「先生と遺書のあらすじ」のところに記載されている。このあらすじは本文までのあらすじである。「先生」が、軍人の未亡人とお嬢さんの二人暮らしの家に下宿して大学に通い始めたこと。人間不信のかたくなな心はこの母と娘の温かい心遣いによっていやされていき、お嬢さんに愛を感じるようになったことが書かれている。

### 3-3 明治特有の新階層

明治末年、本郷界隈には、西洋間がある家等がある新しい山の手的生活スタイルに生きる女性が存在した。前田はその階層に生きる人々を「高等遊民」と称した。漱石は、自らの視点で『こころ』にその階層の人々を掲載させている。漱石は山の手そのものを書き続け、また漱石の周りには「『高等遊民』か、それに似た生活をしている人物も多い」（石原，1999：210）そして「先生」は、職業に就かなくても生活していける利子生活をしている「高等遊民」（小森，1999：217）であった。分析した全ての教科書には明治30年頃の本郷周辺の地図が載っている。漱石とともに、『こころ』の主人公がたどるに道筋に、作品の深い理解が必要だとされている点が、どの教科書教材からも現出されている。この界隈に生きた主婦が夫に対して、同等に意見を述べることは難しいことであった。

お嬢さんとの関係も次のような捉え方ができる。

そもそも「先生」が、奥さんとお嬢さん（「静」）の住む家に下宿をするようになったのは、死んだ父親の遺産相続をめぐる叔父に裏切られ、自分の取り分をすべて金銭に換えて銀行に預け、その「利子の半分」で東京での生活ができるようになったからです。先生は当初からお嬢さんに好意をもっていたのですが、奥さんの示す態度の中に、どうも自分が持っている財産目当てに、お嬢さんを近づけようとしているのではないかという疑惑を感じ、自分の気持ちをお嬢さんにも奥さんにも打ち明けていなかったのです。（小森，1996：144-145）

十分な財産を持って、大学に行き、下宿している「先生」の身分は、富裕層だからこそ経験した人間不信の経験であった。現在の夫婦関係から、この関係性を捉える場合、「最初生徒たち

は、後に奥さんになるお嬢さん（「静」）はいったいどう扱われているんだろう、とか素朴な意見として話ちゃえばいいんじゃないか、とかっている、この夫婦にコミュニケーションというものがあるのか、という問い掛けをしている」（小森，1992：10）と述べられているのは当然のことと言える。しかし、このような階層差があったことで、話をすることができなかった、「静」像というものを学習者に捕らえさせる必要がある。『『ころ』における男性相互の対称的コミュニケーションにおいては、『先生』の妻である『静（お嬢さん）』はたった一人の例外として、つまり共通のコードを持つことが出来ず、男たちとは非対称的な関係にあり、差別されている」（押尾，1992：43）という。このような差別は、漱石の生きた時代の表出であり、このような階層性やこの頃の女性の立場から、作品をメディア・テキストとして捉える必要がある。

## おわりに

『ころ』は丁度、第一次世界大戦の開始された年に朝日新聞に掲載されている。「明治」を道連れにして自己殺人するように漱石が仕組むことによる漱石自身の反戦の意思表示（高木，1994：202）だったのであろうか、個人主義としての殺人だったのであろうか、といった問いがなされるのは自然なことであっただろうが、教科書テキストにその糸口をつかむ要素が多くないのが現実である。夏目漱石はその初版本を岩波書店から出版するに際して、「自己の心を抑へんと欲する人々に、人間の心を抑へ得たる此作物奨む」（夏目，1914）と自ら書いている。日本の近代文学研究において、フランスと逆に、肉筆で書かれた草稿が、活字テキストの起源として絶対化される傾向がある（石原，1992：3）という。石原は、草稿と活字テキストになって出版された本はそれぞれ独自のテキストであり、「活字＝記号表現、草稿＝記号内容」となるという。1914年の4月から8月までの期間『朝日新聞』に掲載され、昭和15～6年頃でも漱石は一種の知的スタンダードだった（中野，1991：244-246）という。ラジオでも昭和20年に『ころ』の朗読が放送（古井，1990：291）されていた。最初の草稿から、新聞になり、高価な造本・装幀・装飾みごとな著書（紅野，1980：22）として出版され、ラジオで放送され、映画化され、ついには教科書教材になった。それぞれにメディアとしての特性があり、メディア・テキストとしての役割がある。メディア・リテラシーの包括的な読みは、この幅広い点から、作品を解釈し、『ころ』をメディア・テキストとしてみることである。

掲載部分から漱石の個人主義観に迫っていくことは、高校生の学習者にとっては困難である。教科書をメディア・テキストとして捉え、原典のテキストとの差異や、テキストが排出されたプロセスを学習者に教えていくことが教師としてのリテラシーである。本稿の検討より、高等学校現代文の教科書教材に掲載された部分の『ころ』の主題である「明治の精神」という重要なキーワードや、個人主義、階層性といったものに迫っていくことができる要素は少ないことが分かった。しかし、国語の授業で扱う教科書教材だからといって、『ころ』の主題が絡む歴史的な観点を避けて通るということはいかなる場合でもできないであろう。今後はこれらの観点を検討した上で、各メ



ディアごとに『こころ』の分析・考察をしていきたい。

<注>

- 1) 文学作品をメディア論の観点から読み解くことは、メディア・リテラシーの方法を使って読むことが可能となる。この方法で読み解くことは、文学作品を多角的な観点からクリティカルに見ることが出来るようになることである。(上松, 2008:29-41)。
- 2) 漱石文学全集第六巻『彼岸過迄・こころ』より(1971)p.660。

<引用文献>

- 赤間亜生(1944)「<未亡人>という記号」『総力討論 漱石の『こころ』』翰林書房 pp.117-140。
- 荒正人(1967)『『こころ』』評伝夏目漱石』実業之日本社 pp.152-167。
- 江藤淳(1964)「人と文学」『夏目漱石集(二)』現代文学大系14 筑摩書房 pp.501-520。
- 古井由吉(1990)「こころ 解説」『漱石文学作品集 12』岩波書店 pp.291-300。
- 平岡敏夫(1976)『『こころ』の漱石』『漱石序説』塙書房 pp.327-368。
- 平岡敏夫(1983)『『こころ』長期安定教材の意味』『国語教室』特集・教材の条件18巻 大修館書店 pp.6-9。
- 堀江與一(1926)「国語科に於る学習訓練」『国語教育史資料』第一巻東京法令 pp.586-589。
- 石井和夫(1983)『spirit 夏目漱石<作家と作品>』有精堂 p.120。
- 石原千秋(1996)『『こころ』のかたち』『漱石研究』第6号 p.16。
- 石原千秋(1997)『『こころ』のオディプス 反転する語り』『反転する漱石』pp.182-203。
- 石原千秋(1999)『漱石の記号学』講談社 p.210。
- 石原千秋・小森陽一(1992)「漱石『こころ』の原稿を読む」『文学』岩波書店 pp.2-13。
- 伊藤整(1959)「解説」『夏目漱石集(一)』日本文学全集 新潮社 pp.523-533。
- 加茂章(1981)『『こころ』の教材化と指導について』『国語教室』教材研究第8巻 pp.24-31。
- 小泉浩一郎(1977)「漱石と「明治の精神」」『近代文学3 文学的近代の成立』有斐閣双書 pp.174-180
- 小泉浩一郎(1979)「評釈・「こころ」新視覚によるテキスト解釈」『国文学』學燈社 pp.130-139。
- 駒尺喜美(1970)『『こころ』における「殉死」の意味』『漱石 - その自己本位と連帯と - 』八木書店 pp.141-163。
- 小森陽一・松原正義・鈴木醇爾(1992)「座談会『こころ』の教材化について」『日本文学』Vol.41 8月号 pp.1-23。
- 小森陽一・中村三春・宮川健郎(1994)『総力討論 漱石の『こころ』』翰林書房。
- 小森陽一(1996)『出来事として読むこと』東京大学出版会 p.144。
- 小森陽一(1999)『『こころ』と個人の自由の問い直し』『世紀末の預言者・夏目漱石』講談社 pp.221-247。
- 小宮豊隆(1975)「私の個人主義」『文芸読本 夏目漱石』河出書房新社 pp.206-208。
- 工藤茂(1979)「教材として見た場合の『こころ』」『国語展望』52巻7号 尚学図書 pp.34-40。
- 公文公男(1979)「教材『こころ』を扱って」『京都大学国文学会誌』第14号 pp.46-59。
- 紅野敏郎(1980)「漱石文学の世界「装幀について」」『夏目漱石』別冊太陽 日本のこころ 32 平凡社 pp.5-27。
- 梶木剛(1976)『夏目漱石論』勁草書房 pp.189-190。

教科書教材をメディア・テキストとして読むことの考察(上松)

- 松本憲一(1979)「明治とは何であったか 新視覚によるアプローチ」『国文学』學燈社 pp.72-78。
- 三浦泰生(1964)「漱石の『こころ』における一つの問題」『こころ』漱石作品論集成第10巻(『日本文学』13巻5号 1964年5月) pp.51-67。
- 三好行雄(1983)『鷗外と漱石 明治のエートス』金鶏叢書5 力富書房 pp.192-183。
- 中村三春(1994)「これは『こころ』ではないナラトロジーの彼方へ」『総力討論 夏目漱石の『こころ』 翰林書房 pp.40-53。
- 中野幸次(1991)「知的スタンダードとしての漱石」『群像 日本の作家1 夏目漱石』小学館 pp.244-246。
- 夏目漱石『漱石全集』(1966)第11巻 pp.614-617。
- 大竹雅則(1992)「『こころ』 静の問題」『漱石文学の基底』桜楓社 pp.200-225。
- 押野武志(1992)「『静』に声はあるのか-『こころ』における抑圧の構造-」『季刊文学』Vol.3 No.4 岩波書店 pp.41-49。
- 朴裕河(2007)『ナショナルアイデンティティとジェンダー 漱石・文学・近代』クレイン pp.385-386。
- 桶谷秀昭(1972)「淋しい『明治の精神』 『こころ』」『夏目漱石論』河出書房新社 pp.176-276。
- 佐々木雅発(1980)「『こころ』 父親の死」『国文学』學燈社 pp.47-54。
- 柴市郎(1992)「『こころ』論 - 「独立」と「関係」 - 」『季刊文学』岩波書店 pp.28-39。
- 清水孝純「『こころ』その隠蔽と暴露の構造」『漱石を読む』別冊国文学 夏目漱石必携』No.14 學燈社 pp.139-148。
- 齋藤勉(2007)『授業批評の力を鍛える』明治図書 p.69。
- 高木文雄(1994)「漱石作品の内と外」『近代文学研究叢書4』和泉書院 pp.193-210。
- 玉井敬之(1976)「『こころ』をめぐって」『夏目漱石論』pp.103-123。
- 滝澤克己(1955)「倫敦の経験(自己本位の決意)」『夏目漱石』洋々社 pp.3-53。
- 滝澤克己(1977)「こころ」『文芸読本 夏目漱石』河出書房新社 pp.32-43。
- 上松恵理子(2008)「メディア論の観点で文学を読むことの提案 新しい文学教育の概念を用いて」『人文科教育研究』第35号人文科教育学会 pp.29-41。

<参考資料：教科書>

- 『高校生の現代文』(2008年初版) 明治書院 <2007年検定済>
- 『現代文 改訂版』(2008年初版) 教育出版 <2007年検定済>
- 『新版現代文』(2008) 教育出版 <2007年検定済>
- 『新編現代文』(2008) 東京書籍 <2007年検定済>
- 『現代文1 改訂版』(2008) 大修館書店 <2007年検定済>
- 『改訂版高等学校標準現代文』(2008) 第一学習社 <2007年検定済>
- 『高等学校現代文』(2008) 第一学習社 <2007年検定済>
- 『現代文新訂版』(2008) 筑摩書房 <2007年検定済>

<参考資料：全集>

- 夏目漱石(1966年印刷発行) 漱石全集 第1~11巻 岩波書店
- 夏目漱石(1971年印刷発行) 漱石全集 第1~10巻 集英社

主指導教員(齋藤勉教授) 副指導教員(佐々木充教授・松本彰教授)